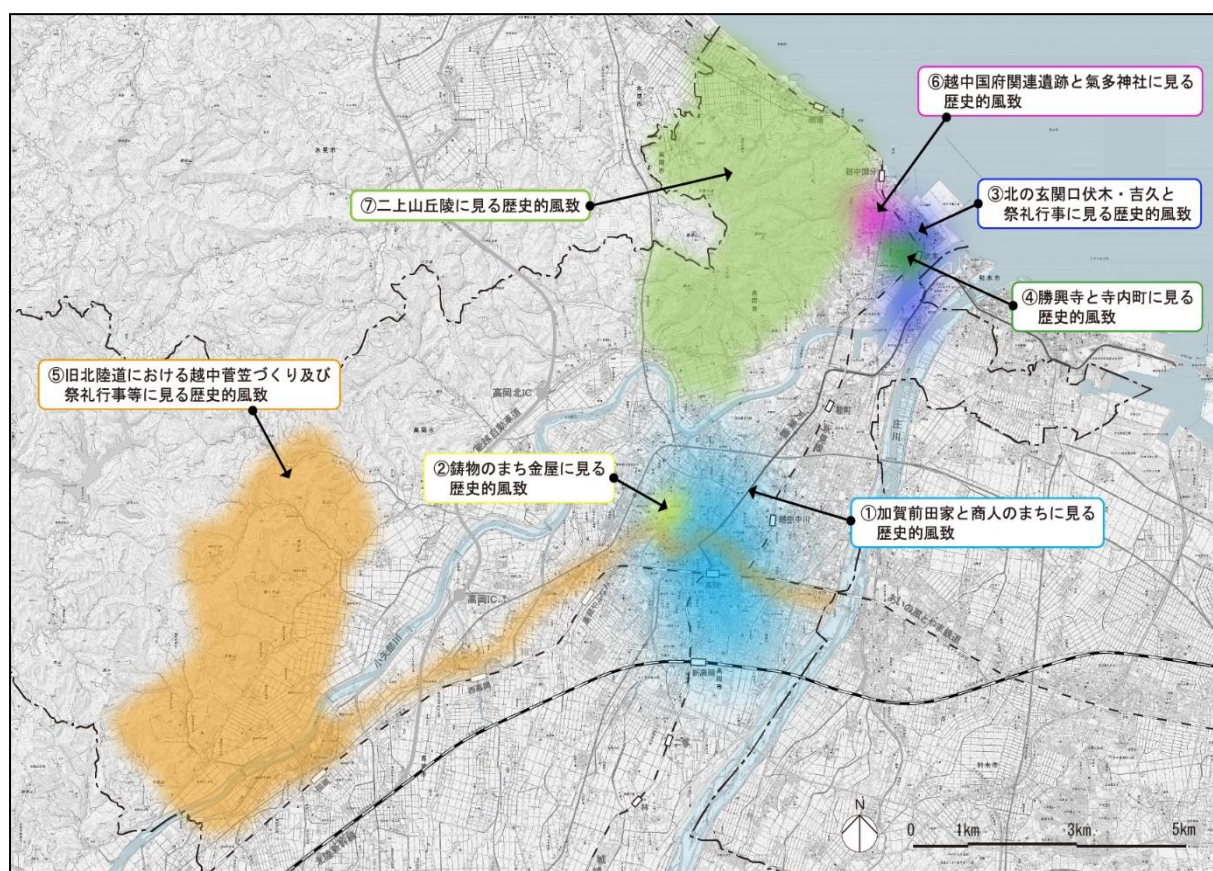


第2章 維持及び向上すべき歴史的風致

歴史的風致とは、「地域におけるその固有の歴史及び伝統を反映した人々の活動とその活動が行われる歴史上価値の高い建造物及びその周辺の市街地とが一体となって形成してきた良好な市街地の環境」（歴史まちづくり法第1条）と定義されており、建造物等と人々の活動を合わせた概念である。

本市には、瑞龍寺や勝興寺など多くの歴史的資産が現存しているだけでなく、歴史と伝統を反映した活動も広く行われている。以下のとおり、歴史的風致を設定する。

- ①加賀前田家と商人のまちに見る歴史的風致
- ②鋳物のまち金屋に見る歴史的風致
- ③北の玄関口伏木・吉久と祭礼行事に見る歴史的風致
- ④勝興寺と寺内町に見る歴史的風致
- ⑤旧北陸道における越中福岡の菅笠づくり及び祭礼行事等に見る歴史的風致
- ⑥越中国府関連遺跡と氣多神社に見る歴史的風致
- ⑦二上山丘陵に見る歴史的風致

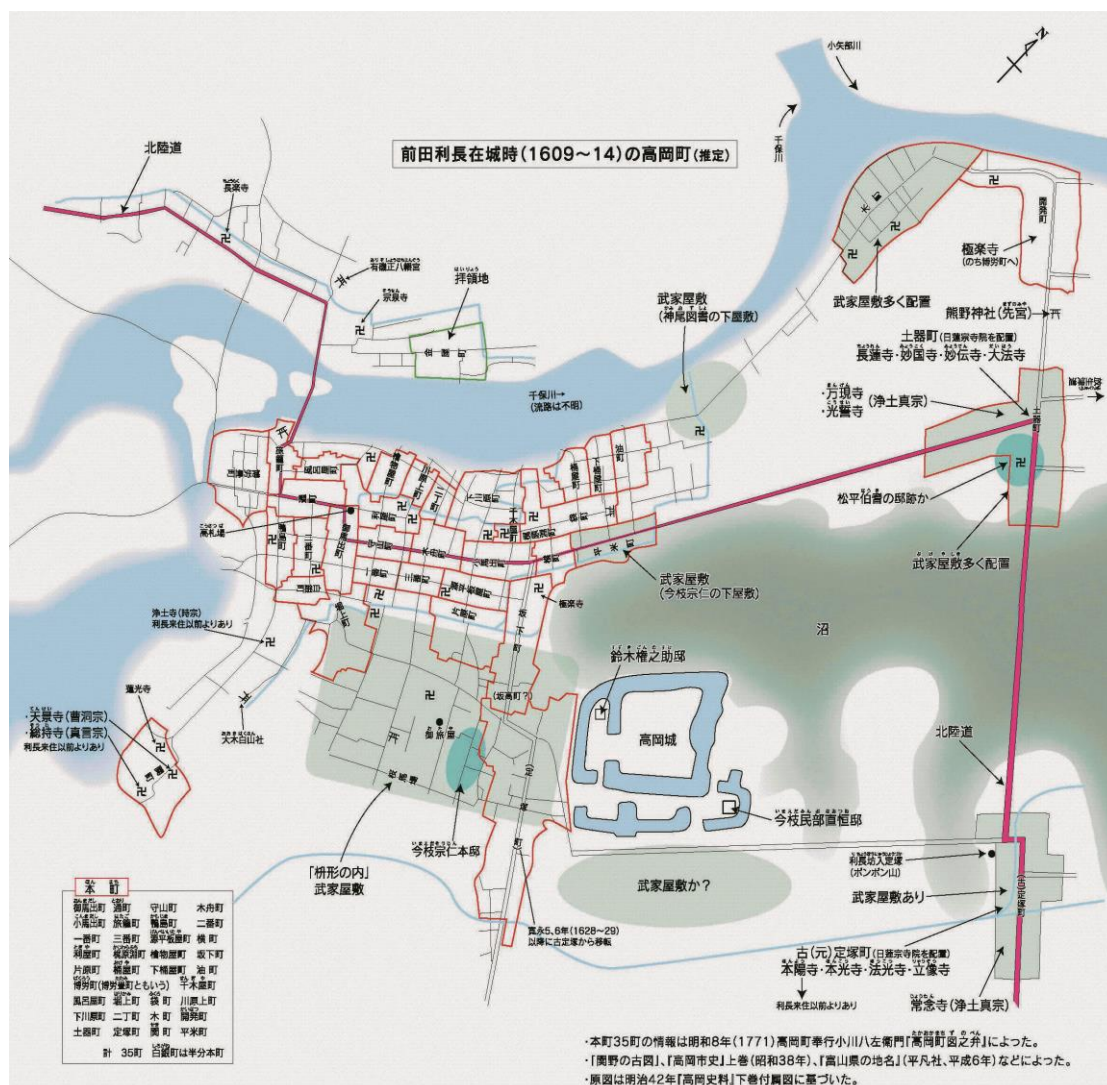


図：歴史的風致の分布図（全体図）

1 加賀前田家と商人のまちに見る歴史的風致

(1) はじめに

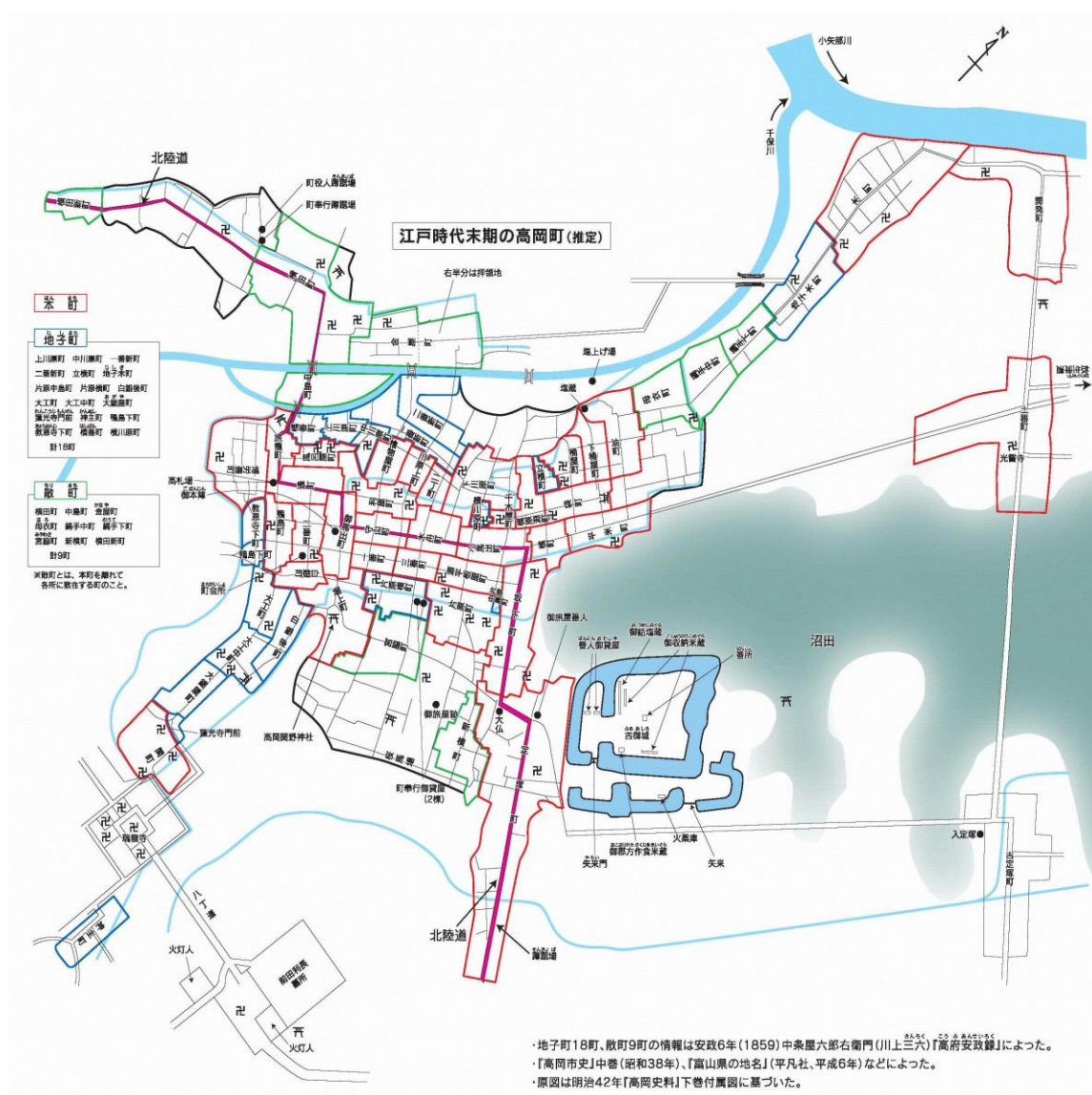
利長や利常による政策や町民たちの努力により、高岡は商工業都市として発展してきた。北は日本海に面し、東に庄川、西側に小矢部川が流れる高岡にとって、町の南側は唯一陸続きの地であり、防御上の不安があった。利長はこの状況に対応するため、禅宗や真言宗などの浄土真宗以外の寺院を防御上の砦としてこの地に配した。また、武士たちは、南西へのびる大地や中川、古定塚、平米町、木町などに住み、町人たちは「本町（役町）」といわれる35町に住居を構えた。明和8年（1771）高岡町奉行小川八左衛門の『高岡町図之弁』や『関野之古図』、昭和34年（1959）『高岡市史上巻』などによった利長在城時の高岡町（推定）を見ると当時の町の配置がよくわかる。



前田利長在城時（1609～14）の高岡町（推定）

[資料：高岡市立博物館 常設展ガイドブック（平成20年（2008））]

慶長19年（1614）に利長が亡くなってからは、幕府の一国一城令により、高岡城は廃城となり、町は急速にさびれていった。そのことを憂いた利常は、高岡を“城下町から商工業の町へ”と転換を図り、問屋や蔵を設置し、物資が集散するようにした。また、街道ルートを町中を通るように変更し、町はずれの寺院群を町中に移動させた。さらに、利長の遺徳を偲び、弔うために、この地に瑞龍寺と前田利長墓所を建立した。その際、瑞龍寺も墓所も周囲を堀で囲むなど、防御上のことを意識していたようである。瑞龍寺の周囲には、同寺の建立と同時に東漸院や林洞庵などの塔頭が配され寺町が形成された。これは、安政6年（1859）中条屋六郎右衛門（川上三六）の『高府安政録』、明治42年（1909）『高岡史料』下巻付属図などによった江戸時代末期の高岡町の地図から見ることができる。



江戸時代末期の高岡町（推定）

[資料：高岡市立博物館 常設展ガイドブック（平成20年（2008））]

瑞龍寺ずいりゅうじと前田利長墓所まえだとしながぼしよは、参道である八丁道はっちょうみちで結ばれている。この八丁道はっちょうみちは、東西に長さが8丁（873m）あることからそう呼ばれている。昔は、石灯籠が並んでおり、加賀前田家16代当主である前田利為侯爵まえだとしなりが夫婦揃って通った写真も残されている。



八丁道を行く前田利為侯爵夫妻

(大正4年(1915)) 高岡市立博物館提供



現在の八丁道

瑞龍寺ずいりゅうじの門前は、高岡の町の中心部から井波方面へと通じる井波道いなみが通っていた地で、人と物が行き来する往来であり、現在でもクランク状に曲がったいわゆる枡形道ますがたが残り、脇には開町時に通された庄方用水しょうかたが流れ、庄方用水沿いには農家の建築様式を残す伝統的な主屋や蔵が並び、瑞龍寺ずいりゅうじや周辺寺院と一体となって歴史的な空間を形成している。

第1期計画では、加賀藩としての政策と町民による活動という観点からそれぞれ歴史的風致を設定していた。しかし、近世においては藩と町民が共に高岡の発展に努めてきたこと及びそのことが現在にもつながっているという高岡の歴史が全国的にも稀有であるとして日本遺産の認定に結びつき、市民にその歴史ストーリーが浸透していることを踏まえ、今回の第2期計画においては、従来の歴史的風致を統合・再整理し、改めて設定するものとした。

（2）歴史的風致を形成する建造物等

（高岡御車山祭^{たかおか みくるまやまつり}に関連）

①山町筋^{やまちょうすじ}伝統的建造物群保存地区

慶長 14 年(1609)の高岡開町の際、守山^{もりやま}・木舟^{きふね}等の近隣の城下町から商人を招いてつくられたのが山町^{やまちょう}のはじまりである。高岡御車山^{たかおか みくるまや}を所有していることから山町^{やまちょう}と呼ばれており、街道に面した町筋を山町筋^{やまちょうすじ}と呼称している。

山町筋^{やまちょうすじ}伝統的建造物群保存地区には、明治33年(1900)の高岡大火からの復興にあたって建てられた、防火構造の土蔵造りの建造物が立ち並んでいる。全体的に

規模が大きく、黒漆喰の壁や観音開きの土扉など重厚な外観を持つ反面、内部は繊細な数寄屋^{すきや}風の造りとしている。また、レンガの防火壁やトラス構造の小屋組みといった洋風建築の要素も取り入れており、高岡開町時からの歴史を伝えるとともに、明治の市街地整備や防災対策に主眼を置いた近代化の歴史をうかがい知ることのできるものである。



山町筋の町並み

①-1 菅野家住宅^{すがの けじゅうたく}

菅野家^{すがの}は、北前船^{きたまえぶね}による交易や金融、紡績などで財を成した高岡でも有数の名家で、菅野家住宅^{すがの けじゅうたく}は明治33年(1900)の大火後に建てられたものであり、平成6年(1994)に重要文化財に指定されている。主屋は、切妻造り・平入り・2階建て・黒漆喰仕上げの豪壮な建物で、意匠的にも優れ、両袖のレンガの防火壁や有事の際に引かれる鉄板張りの防火戸など防火を意識した工夫がみられる一方、



菅野家住宅

下屋の軒裏に施された鰻^{こてえ}絵や、植物であるアカンサスを模した鋳物柱など、凝った意匠を随所に見ることができる。さらに、重厚な外観とは対照的に内部は数寄屋^{すきや}風の造りとなっており、柱や天井板の銘木、鮮やかなベンガラ壁など、繊細かつ優れた意匠が施されている。

①-2 ^{いかだい けじゅうたく} 筏井家住宅

筏井家は代々、綿糸などの卸商を営んでいた商家である。明治36年(1903)の建築であることが当家に伝わる『普請文書』から確認されており、平成10年(1998)に県指定有形文化財となった。2階の窓につく観音開きの土扉は、すべて開けられたときに隣同士の扉が一体化して納まるよう設計されている。屋根には採光のための天窗がついている。



筏井家住宅

①-3 ^{きゅうむろさき けじゅうたく} 旧室崎家住宅（高岡市土蔵造りのまち資料館）

室崎家は綿糸や綿布の卸商を営んでいた商家で、明治36年(1903)の建築と伝えられていると『高岡市山町筋伝統的建造物群調査報告書(昭和61年(1986))』に記載があり、平成10年(1998)に市指定有形文化財に指定されている。当時、所有者の転居に伴い本市が資料館として整備した。2階の窓に観音開きの土扉が付いていないことを除けば、高岡の土蔵造りの特徴をすべて備える大規模かつ上質な町家である。また、^{やまちょうすじ}山町筋の町家ではめずらしく前庭がある。



旧室崎家住宅

①-4 ^{いなみ やぶつだんてん} 井波屋仏壇店

井波屋仏壇店は、明治38年(1905)に元々お茶の卸商の店舗として建てられた建物を井波氏^{いなみ}が購入して仏壇店を営んでいるものであり、平成10年(1998)に国の登録有形文化財に登録された。店の土間部分は2階が吹き抜けで、四周に回廊がついている。正面の意匠は鋳物製の唐草模様で飾る大きなアーチ窓を置き、洋風に仕上げるなど、^{やまちょうすじ}山町筋でも独特の建造物である。



井波屋仏壇店

①-5 旧高岡共立銀行

旧高岡共立銀行は、大正3年（1914）に建築されたと『高岡市山町筋伝統的建造物群調査報告書』に記載がある。本格的なレンガ造り建築物であり、正面入口のエンタシスを持つ柱やペディメント、窓周り等に使われている白御影石が、赤レンガのアクセントとなっており、市民からは「赤レンガの銀行」と呼ばれて親しまれている。



旧高岡共立銀行

②高岡城跡

慶長14年（1609）3月の火災により富山城を焼失した利長は魚津城に難を逃れ、翌月には関野と呼ばれた地に新たな城を築く許可を徳川家康に得て築城工事に着手した。突貫工事を敢行した結果、半年後の9月13日には高岡城と名付けた城に入城した。しかしながら、利長の死と一国一城の令によりわずか6年で廃城となった。城は本丸、二の丸、三の丸、明丸、鍛冶丸に加え、現在の梅林と小竹藪という7つの郭で築かれ、それぞれが土橋でつながられている。廃城後は、加賀藩高岡町奉行の管理下に入り、本丸跡に2棟の米蔵と1棟の塩蔵を置き、明丸跡には火薬庫を設けていた。高岡城跡は、堀や郭のかたちが約400年間良好に保存され、築城技術が高度に発達した慶長期（近世初頭）の縄張りをはほぼ完全な姿で留めており、近世初頭の政治・軍事の状況や築城技術を知る上で重要である。

右下の写真は、明治42年（1909）の皇太子殿下（後の大正天皇）富山県行啓の際に、高岡城跡（当時は高岡公園）で高岡御車山を御覧になった時のものである。当時の高岡にとっての最高のおもてなしと語られている。



高岡城跡



高岡城跡（高岡古城公園）で撮影された「東宮殿下御台覧之光景」（明治42年（1909））

おお て まちしんめいしゃはいでん
③大手町神明社拝殿

慶安5年（1652）に前田利長墓所の御廟守として建てられた繁久寺の鎮守堂拝殿である。昭和59年（1984）に市指定有形文化財となった。全体を唐様で統一し、装飾性豊かな江戸時代初期の優れた建築で、間口3間、奥行1間の入母屋造り平入り棧瓦葺（元こけら葺）向唐破風は日光東照宮式といわれている。

明治初年頃（明治7年とも）に五福町神明社本殿とそれぞれ移築されているが、建立にあたっての大工は高岡の住人、作事奉行は加賀藩によることが棟札より判明している。本市の歴史を今に伝える貴重な文化財として大切に維持管理されている。（昭和59年（1984）3月1日市有形文化財の指定要旨より）



大手神明社拝殿

さ の け じゅうたく
④佐野家住宅

明治33年（1900）の高岡の大火直後に、菅野伝右衛門と並ぶ財界の巨頭として活躍した菅池貞次郎が建設したもので、左官は大野宗平と伝えられている。平成9年（1997）に登録有形文化財となった。外観及び内部意匠ともに洋風建築の意匠が多く取り入れられており、山町筋の土蔵造り建造物のうち、最も洋風の要素が取り入れられた建造物である。



佐野家住宅

わ か い け じゅうたく ちゅうえつ
⑤若井家住宅（旧中越銀行）

木造2階建てで、明治35年（1902）に山町筋に中越銀行の支店として建設された。漆喰で塗り込め、2階正面には両開戸を有するなど土蔵造りの町家風外観を基調としながらも、柱や天井などに洋風意匠を散りばめる。（平成22年（2010）9月10日登録有形文化財の登録要旨より）

現在は住宅として使用されており、山町筋の土蔵造りにみられる重厚な外観と内部の洋風の折衷という高岡の近代化の過程を伝える建造物である。

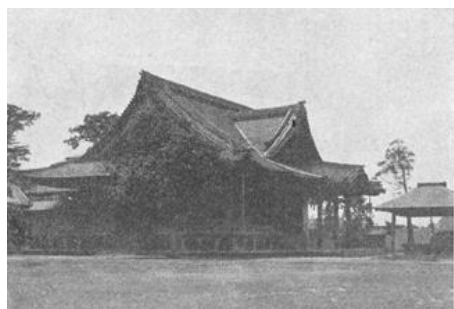


若井家住宅

⑥^{せきの じんじゃ}関野神社

関野神社は熊野社及び加久彌社、稲荷社が合祀された由緒ある神社で、拝殿奥に鎮座する各社の建造物は、享保年間（1716～1736）や文化年間（1804～1818）に修理され、建築様式や構造材の年代から近世初頭若しくはそれ以前に建てられたものとされる。^{せきの じんじゃ}関野神社本殿三社改修に伴う調査結果によると、本殿にある棟札には享保8年（1723）のものがある。

高岡関野神社 春季例大祭の際には、^{たかおか}高岡御車山が巡行される。出発時に修祓を行なった後、町内曳き回しを経て、坂下町での曳揃から関野神社の曳納まで旧慣に従って巡行する。



関野神社

（『高岡市史上巻』昭和34年（1959）より）



現在の関野神社

⑦^{ごくらく じ}極楽寺

『富山県近代和風建築総合調査表』によると、明治以降の過去帳の記録から明治23年（1890）に本堂再建とある。

現在博労町にある寺院は、興国4年（1343）^{むねよし}宗良親王の開基である。初めは時宗で、7代目から浄土宗に変わった。



極楽寺

（『たかおか—歴史との出会い—』平成3年（1991）より）

⑧^{ご ぶくまちしんめいしゃ}五福町神明社における秋季祭礼行事に関連するもの

⑧^{ご ぶくまちしんめいしゃ}五福町神明社本殿

慶安5年（1652）に建てられたもので、昭和59年（1984）に市指定有形文化財となった。^{ご ぶくまちしんめいしゃ}五福町神明社本殿は、元は^{おお て まちしんめいしゃはいでん}大手町神明社拝殿とともに前田利長墓所の御廟守として建てられた^{はんきゅう じ}繁久寺の鎮守堂であり、明治初年頃にこの場所に移築されたとされている。全体を唐様で統一した近世初期の禅宗様建築の影響を受けた優れた建築であり、建物様



五福町神明社本殿

式は入母屋造り平入りの棧瓦葺の木造である。（昭和 59 年（1984）3 月 1 日市指定有形文化財の指定要旨より）

おお て まちしんめいしやはいでん
 大手町神明社拝殿とともに本市の歴史を今に伝える貴重な文化財として大切に維持管理されている。

⑨清都酒造場主屋

明治 20 年（1887）頃に建てられた商家で、平成 12 年（2000）に登録有形文化財となった。構造は、2 階建て、切妻造り、棧瓦葺、平入りで、登り梁や袖壁及び厚板目板打の庇など伝統的な形式である。



清都酒造場主屋

（御書祭に関連するもの）

⑩木町神社

勸請の年月は不明であるが、明治 2 年（1869）2 月の『社号祭神境内外書上 申 帳』しゃごうさいじんけいだいがいかきあげもうしちょうには、社殿は幅 4 間半深 4 間半、本殿は幅 3 尺斗深 2 尺斗、拝殿は幅 2 間深 2 間半斗との記録が残っている。なお、石柱には「大正三年九月建之」と刻印されており、鳥居にも「大正八年十一月三日敬樹」との刻印ががある。



大正 8 年 11 月 3 日敬樹
との刻印が見られる



木町神社

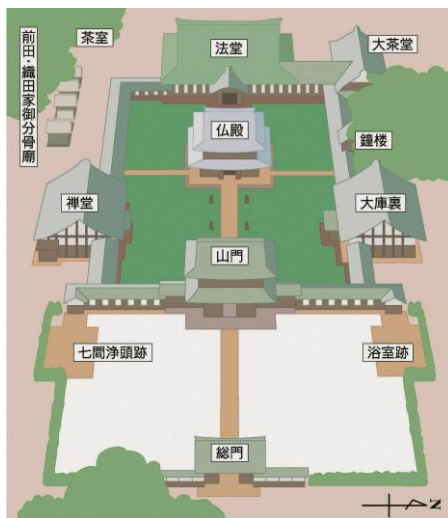


大正 3 年 9 月建之との
刻印が見られる

まえだとしなが
(前田利長公顕彰祭に関連)

⑪瑞龍寺
ずいりゅうじ

瑞龍寺は、利常が利長の遺徳を偲び、正保2年（1645）頃から造営を開始し、利長の50回忌にあたる寛文3年（1663）に完成した曹洞宗寺院である。平成9年（1997）には、仏殿・法堂・山門が、それぞれがきわめて優れ完成度が高く、三者が並ぶ配置構成がきわめて均整のとれた美しい比例を示しており、我が国の社会・文化に影響を及ぼした曹洞宗の建築を知る上で特に深い意義を有しているとして国宝に指定された。



瑞龍寺伽藍配置図



瑞龍寺伽藍を北東から望む



瑞龍寺山門及び回廊

i) 総門・山門

総門は、万治年中（1658～1660）に建てられ、三間薬医門形式・切妻造り・こけら葺の建築である。総門をくぐると、眼前には中央に山門、そこから左右に延びる回廊の左側上方に禅堂の屋根が、右側上方に大庫裏の屋根が目飛び込んでくる。山門は、文政3年（1820）に建てられた三間一戸二重門・入母屋造り・こけら葺建物で、通常の禅宗二重門に比して、下層屋根に対する上層屋根の低減率が低く、雪などによって下層屋根を傷めないための雪国独自の工夫が見られる。



山門

ii) 禅堂・大庫裏

山門をくぐり回廊を左へ進むと禅堂がある。禅堂は僧侶が座禅修行をするための建物で、寛延元年（1748）再建の切妻造り・こけら葺建物である。禅宗寺院にとって禅堂（僧堂）は非常に重要なものであるが、遺構は非常に少なく、京都の東福寺、宇治の万福寺と並び重要文化財に指定されている。回廊を右に進むと大庫裏がある。大庫裏は、相対する禅堂とほぼ同じ規模・意匠の建物である。明治9年（1876）頃一旦除却され、同年に向拝のみが芹谷村千光寺（現砺波市）に売却されていたが、昭和・平成の大修理の際に売却の事実が発見されたことから復原されたものである。



禅堂と回廊

iii) 仏殿

山門から一直線上には仏殿・法堂がある。仏殿は伽藍内で最も見栄えのする建物で、同寺の創建当初から残されているものである。戸室石の基壇上に築かれた方三間もこし付・入母屋造りで、最大の特徴として屋根が鉛瓦で葺かれていることが挙げられる。鉛瓦葺の建物は重要文化財では他に金沢城石川門しかなく非常に稀有なものである。また、上層の組物



仏殿

を三手先の詰組とし、^{おうぎたる き}扇垂木が整然と配列され注目に値する。さらには、内部は吹き抜けとされ、組物や海老虹梁・太瓶束などの架構材は複雑ながらも計算され尽しており、その美しさには一見の価値がある。

iv) ^{はつとう}法堂

^{ぶつでん}仏殿からさらにまっすぐ進むと^{はつとう}法堂にたどり着く。^{はつとう}法堂は寛文3年（1663）建立の入母屋造り・銅板葺建物で、桁行11間、梁間10間の大規模な書院造大方丈である。^{はつとう}法堂の中央奥室の内陣には^{としなが}利長の位牌が安置されている。



法堂

⑫ ^{まえだ としなが ぼしよ}前田利長墓所

^{まえだ としなが ぼしよ}前田利長墓所は、^{としつね としなが}利常が利長の冥福を祈り、正保3年（1646）に造営したもので、内区の御^ご廟^{びよう}と外区及びそれらを隔てる堀からなっており、平成21年（2009）に金沢市とともに加賀^か前田家墓所として史跡に指定された。『墓地^{ぼち}取^と拡^か願^{がん}付^ふ図^ず』にも「御廟^{ご びよう}」と記載がある。内区^{ご びよう}の御廟^{ご びよう}の基壇には、加賀の戸室石を使用し、狩野探幽の下絵と伝承される130枚もの蓮華陽刻が装飾されている。外堀と内堀の二重の堀で区画された現在の墓域は、約33,000㎡（約1万坪）で、大名個人墓としては全国最大級の規模である。

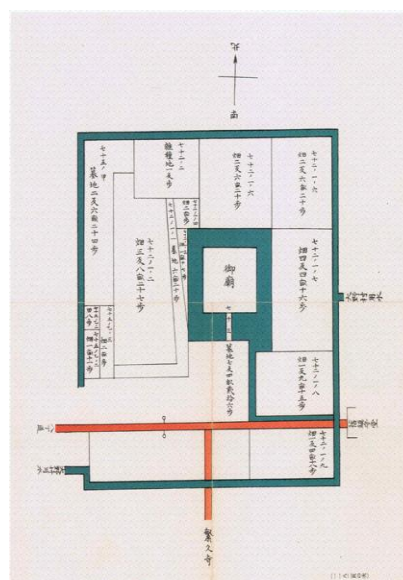


前田利長墓所（御廟）



利長墓所の参道（大正期）

高岡市立博物館提供



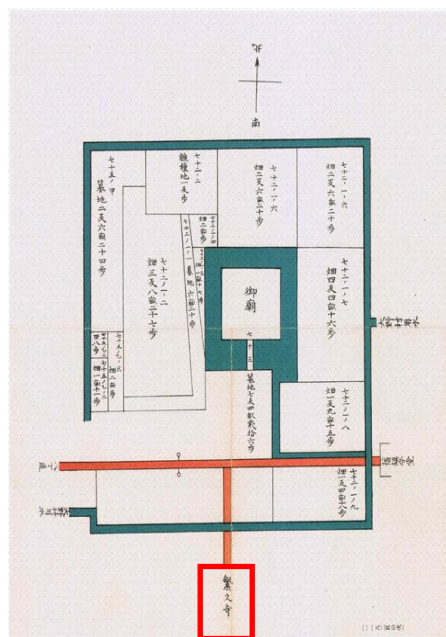
「墓地取拡願付図」（明治42年（1909）『高岡史料』下巻付図）高岡市立博物館蔵

⑬ 繁久寺

前田利長墓所の御廟守として造営された曹洞宗の寺院で正保3年（1646）の利長の33回忌を期して建立された。現在の建物は安政6年（1859）の全焼後に文久2年（1862）に再建されたと『近世社寺建築調査表』に記載がある。再建時は、規模や構造は元の堂宇をそのまま模したと伝えられている。また、『墓地取払願付図』にも「繁久寺」と記載がある。他の寺院とは構造が異なり、清閑で床しい趣があり、回廊には豊かな表情をした五百羅漢像が安置されている。



繁久寺



「墓地取払願付図」（明治42年（1909）『高岡史料』下巻付図）高岡市立博物館蔵

⑭ 総持寺

総持寺は瑞龍寺の北にある真言宗寺院である。利長が高岡に城を築き町を開いた折、「高岡」という地名を授けたと言われているなど、前田家と強い繋がりを持っていた。観音堂は入母屋造り・棧瓦葺の建物で、正面に1間の向拝を設けている。『高岡市史上巻（昭和34年（1959））』には現在と変わらない観音堂の様子が掲載されている。



総持寺観音堂

（『高岡市史上巻』昭和34年（1959）より）

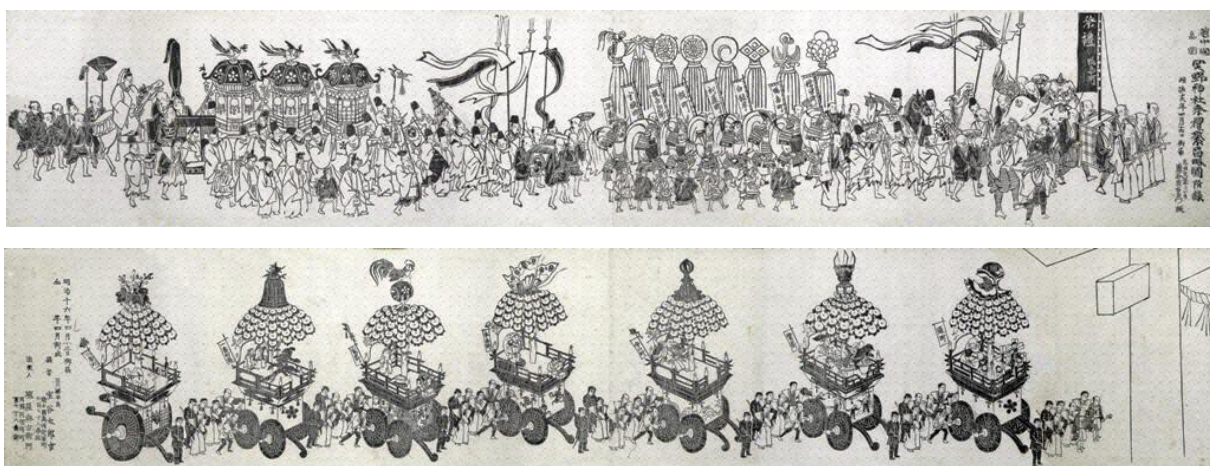


現在の総持寺観音堂

（3）歴史的風致を形成する活動

①高岡御車山祭

高岡御車山祭は、毎年5月1日に利長を祀った高岡関野神社の春季例大祭として行われ、御車山と呼ばれる7基の山車が優雅な囃子とともに中心市街地を巡行する。これは、『越中国高岡関野神社祭礼繁昌略図付録』からも見ることができる。



越中国高岡 関野神社祭礼繁昌略図付録（明治16年（1883））高岡市立博物館蔵

高岡御車山は、慶長14年（1609）に利長が高岡に城を築き町を開いた折、城下の町内の大町に与えたもので、祭礼の山車として奉曳きしたのが始まりといわれている。伝承では、豊臣秀吉が京都の聚楽第に後陽成天皇と正親町上皇の行幸を仰いだ際に使用した鳳輦の車を利長の父・利家に下賜し、それが利長に伝わり、高岡町民に与え、改装させたものとされている。高岡御車山は昭和35年（1960）に重要有形民俗文化財に指定、高岡御車山祭の御車山行事は昭和54年（1979）に重要無形民俗文化財に指定されている。また、「山・鉦・屋台行事」としてユネスコ無形文化遺産に登録された我が国を代表する山車行事のひとつである。その由緒について、はっきりと記すものはほとんど残っていないが、利長が高岡城在城時（慶長14年～19年（1609～1614））に側近の士に対して宛てた『御車山文書』（市指定有形文化財）には、制作の許可と完成した山車の出来に対する賞詞が述べられており、その由緒の一端を知ることができる。以来400年間、御車山は町民らにより大切に守り継がれている。

i) 準備

未だ寒さの厳しい1月の高岡御車山保存会総会から始まる。総会は関野神社で行われ、町の代表者たちが集まり、厳粛な雰囲気の中、その年の代表となる年番町と年番代表が決められる。

祭礼執行の体制が決まり、2月頃からは花傘づくりが始まる。花傘は御車山には欠かせないものである。赤・白・黄の三色の菊花が付けられた大枝が傘状に組まれた姿は、重厚な御車山を一層華やかなものに見せている。花傘づくりは町ごとに決められた場所に集まり、コツコツと花を作る。



保存会総会



花傘づくり

4月には与四兵衛祭が行われる。津幡屋与四兵衛は、放生津で御車山と類似の山車が作られたことに対し命をかけて異義を唱え、牢中で獄死した傑人で、御車山の歴史を語る上で欠かせない人物である。役員全員が紋服を着用し、関野神社境内にある小さな祠前で与四兵衛を祀り、5月1日に祭礼を行うことを奉告し手打ちを行う。



与四兵衛祭

4月の終わり、祭礼前日の30日に宵祭を迎える。宵祭の舞台となる山宿は、神を迎える御旅所と言われており、安永5年（1776）には町奉行から「山宿は賑やかにして不敬にならないように」というお触れが出るほど選ばれたものにとっては大仕事であり、一世一代の光栄なことであった。昔から山宿を勤める家は、町内に新たに

引っ越してきた家や慶事があった家などが選ばれており、その家では畳や戸・障子の取替えを行い、心して準備を行っていた。現在、重要伝統的建造物群保存地区に選定されている山町筋^{やまちょうすじ}では、毎年、伝統的建造物の修理事業を実施しているが、この山宿^{やまやど}を迎えるために家の修理を行う者もいるほどである。

山宿^{やまやど}では、まず本座・相座の人形が幔幕と金屏風を背景に飾り付けられる。なお、本座の人形とは、屋台後方部に鎮座する等身大のもののことで、相座の人形とは、屋台前方に置かれた小型のものを呼ぶ。飾り付けが終わると、町内の者が参列し神官によるお祓いと人形への御霊移し^{まんまく}がなされる。御霊移しが終わるとお酒や餅が振舞われることになっている。



宵祭の様子



御車山祭山宿の飾り

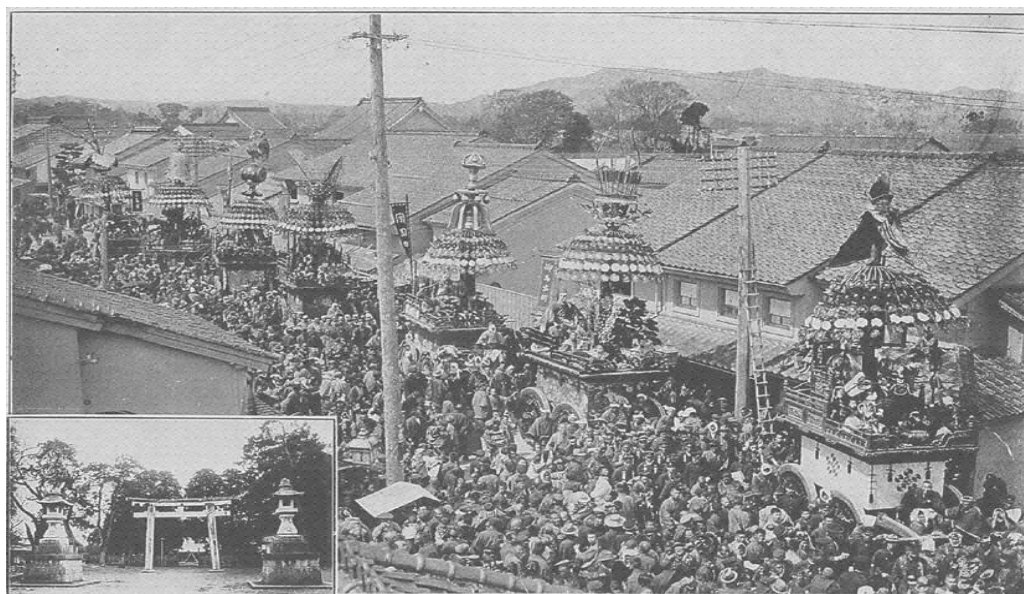
ii) 当日

宵祭^{よいまつり}から一夜明けると祭礼当日である。当日は、朝早くから山宿^{やまやど}前で山車^{やま}が組み立てられ、飾り付けられる。その後修祓^{しゅばつ}が行われ、町内を曳き回し、坂下町^{さかしたまち}で曳き揃えすることとなっている。一同揃った後、手打ち式^{てうちがし}が行われ、山車は坂下町の坂を上っていくのだが、これは、利長^{としなが}在世中、城内三の丸まで曳き登った古例に因むものだとも言われている。

その後、片原町^{かたはらまち}十字路で市長の出迎え、勢揃い式が行われる。これは、かつてこの地が御貸家^{おかしや}（町奉行の居宅）であり、代々の町奉行が御車山^{みくるまやま}を観覧した名残で行われるものである。なお、御車山は高岡市民のみならず、周辺地域の人々にとっても古くから大きな興味の対象となっており、勢揃い式には、市内外から道路を埋め尽くさんばかりの大勢の観客が集まり、御車山の形姿に見入っている。この様子は、『富山県写真帖（明治42年（1909））』からも見る事ができる。



勢揃い式

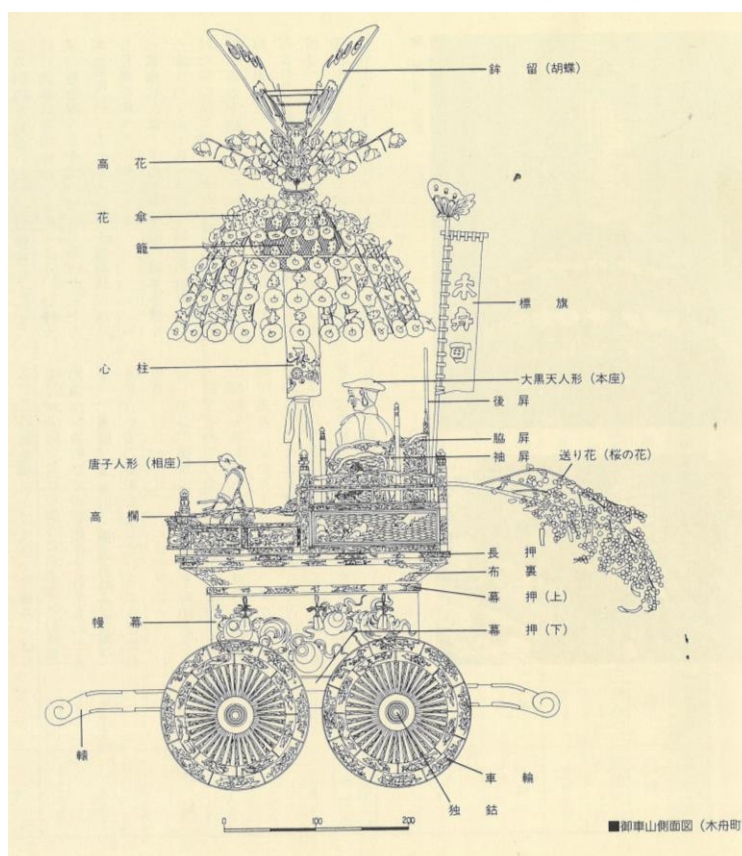


（『富山県写真帖』富山県編 明治42年（1909）より）

御車山の山車は、金工技術や漆工技術など本市が誇る工芸技術の粋を集めたものといわれ、多くの名工の技術が施された逸品に彩られている。車輪は、木地に鮮やかな漆が塗られ、その上に桐や菊、加賀藩の家紋である剣梅鉢、龍などの文様の彫金金具が施されている。

下図の御車山側面図を見ると、地山箱の周囲に幔幕が張りめぐらされている。この幔幕は、精巧な織物生地に優れた染色が施されたもので、濃青色や朱色などの生地上に、仙境図や春秋舞楽の図など様々な図柄が施されており、目にも鮮やかなものである。飾山を飾る高欄や後屏には、優れた漆工が施されている。高岡漆器は、開町後まもなく膳やお盆、簞笥、鏡台などの製作がはじまり、幕末から明治期にかけて勇助塗や青貝塗などの独創的な技法が確立され、漆器産地としての基盤が築かれた。

特に、通町の後屏は、高岡漆器の代表作といわれるもので、孔雀や牡丹、青海波などの優れた彫刻の上に、漆塗りは胡粉下地、朱塗りの上には灰墨による古味付けが施されている。その他のものも、それぞれが名工の作と伝えられるもので、漆の色味や金箔が鮮やかである。この他にも、微細な彫り物が成された長押や幕押などの金具、人形衣装など、山車を着飾る意匠は見尽きることがない。勢揃い式に訪れた観客達は、7基の山車を見比べながら勢揃いを楽しんでいる。



御車山側面図（木舟町）（『高岡御車山』 平成12年（2000）高岡市教育委員会）



木舟町車輪



御馬出町幔幕



通町後屏

勢揃い式が終わると、山車^{やま}は一台一台向きを変え順に動き出す。観客たちは、曳き手たちの息のあった動きと、その技に感心し大きな歓声をあげる。

その後、夕刻の関野神社^{せきの じんじや}での曳き別れまで、袴^{かみしも}と一文字傘に威儀を正した山役員が先頭を歩き、半纏^{はんてん}に白足袋姿の曳き手が曳く山車^{やま}は、佐野家住宅^{さの けじゅうたく}、旧高岡共立銀行、井波屋仏壇店、筏井家住宅^{い なみ や ぶつだんてん}、菅野家住宅^{い かだ い け じゅうたく}、旧室崎家住宅^{すがの け じゅうたく}などを通る所定のルートを巡行する。この巡行路は、開町以来ほとんど変更がなく、各所に様々なエピソードが残されている。途中に博労町通り^{ばくろうまち}へわざわざ引き入れて極楽寺^{ごくらくじ}へ拝礼するのは、同寺が浄土宗でありながら熊野神も祀っているためともいわれる。また、利屋町^{とぎやまち}では御車山^{みくるまやま}の折り返しがなされるが、これはこの地の津幡屋^{つばたや}と四兵衛^{よしべえ}の居住地に顕彰碑があり、そこで神楽を奏するためである。その他にも、特別に功績があった家の前や山役員宅前では、所望と称して神楽が奏せられる。



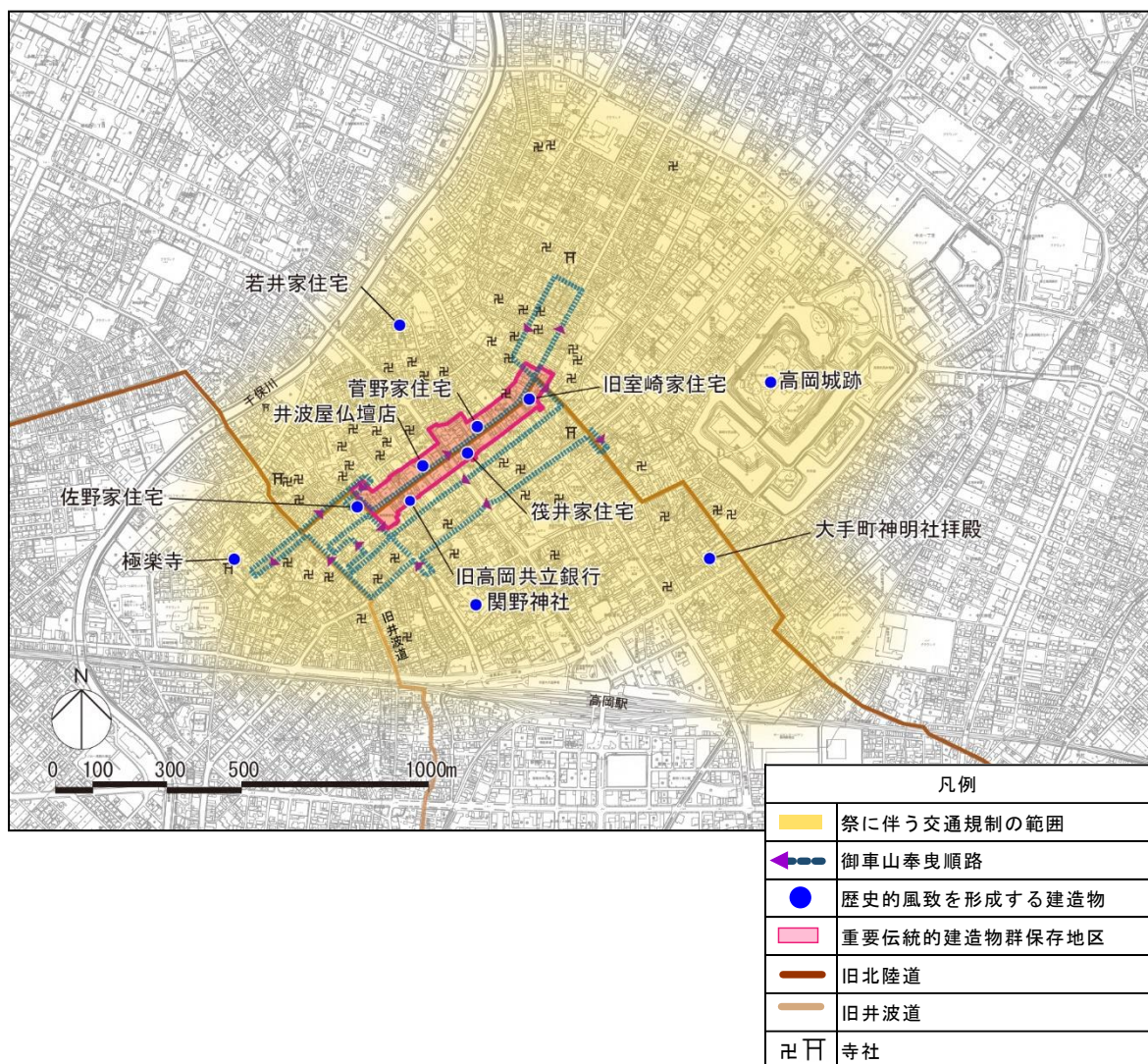
山町筋を巡行する御車山



小馬出町（昭和元年（1926））飯野馨子

そして、何といても御車山^{みくるまやま}の巡行が最も映えるのは、平成12年（2000）に「伝統的建造物群が全体として意匠的に優秀なもの」として重要伝統的建造物群保存地区に選定された山町筋^{やまちょうすじ}での巡行の様子である。山町筋^{やまちょうすじ}は、元和元年（1615）の一国一城令による高岡城の廃城後、利常^{としつね}の施策や町民の努力により商工業の道を歩んだ高岡において最も栄えた地である。当時、締綿市場^{ていめん}や米商会所が置かれ、明治以降になると旧高岡共立銀行などの銀行が次々と建てられた、主に土蔵造りの民家からなる商家町である。

また、裏手の通りなどにも土蔵造りをはじめとする伝統的な建造物が数多く残されており、祭礼日にはこれらの建物に幕を張り、提灯を吊るして山車^{やま}の巡行を迎えることとなっている。なお、巡行に際しては大規模な交通規制とともに円滑に執り行うことができるよう大手町神明社拝殿^{おおて まちしんめいしゃはいでん}、高岡城跡^{たかおかじょうあと}、若井家住宅^{わか い け じゅうたく}を含む地区全体が協力して実施にあたっている。



図：高岡御車山祭に係る範囲

②五福町神明社における秋季祭礼行事

五福町神明社は、現在の五福町にあり、獅子舞などの行事が行われている。五福町は地子木町、縄手町、縄手中町などにより近年成立した自治会であることもあって、それぞれの獅子舞行事は旧町のしきたりで行うなど、古くからの形のまま伝承されている。いずれにも共通することとしては、勇壮な芸態であることが言える。胴幕に複数人が入る百足獅子であり、氷見獅子の特徴とされるリズミカルな舞と、射水獅子の特徴とされるシャグマと呼ばれる被り物を被った天狗が登場する。

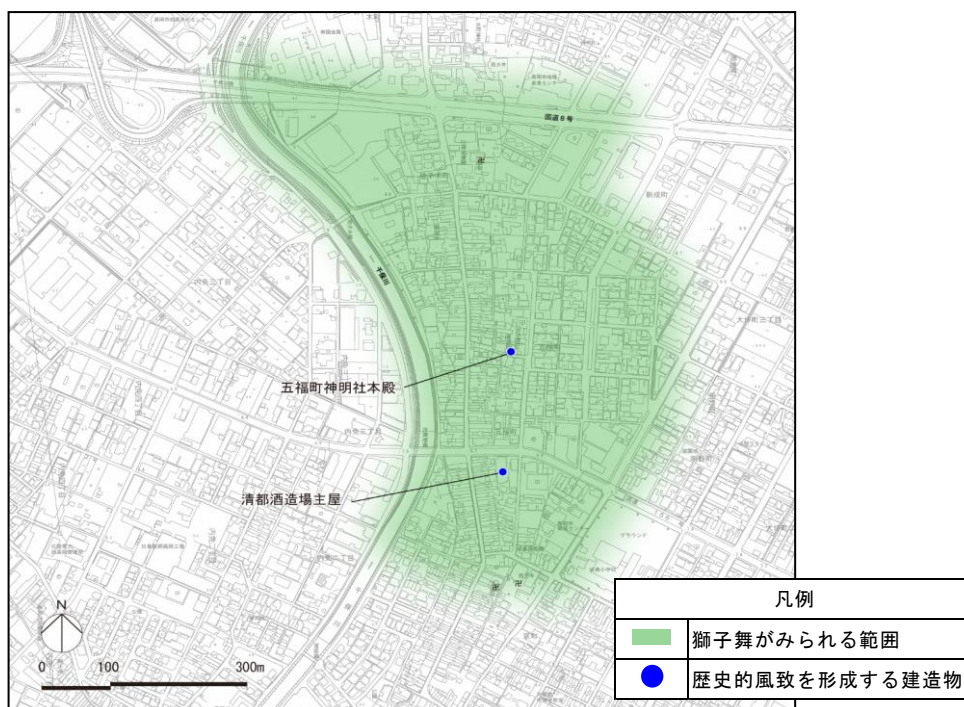


獅子舞の様子

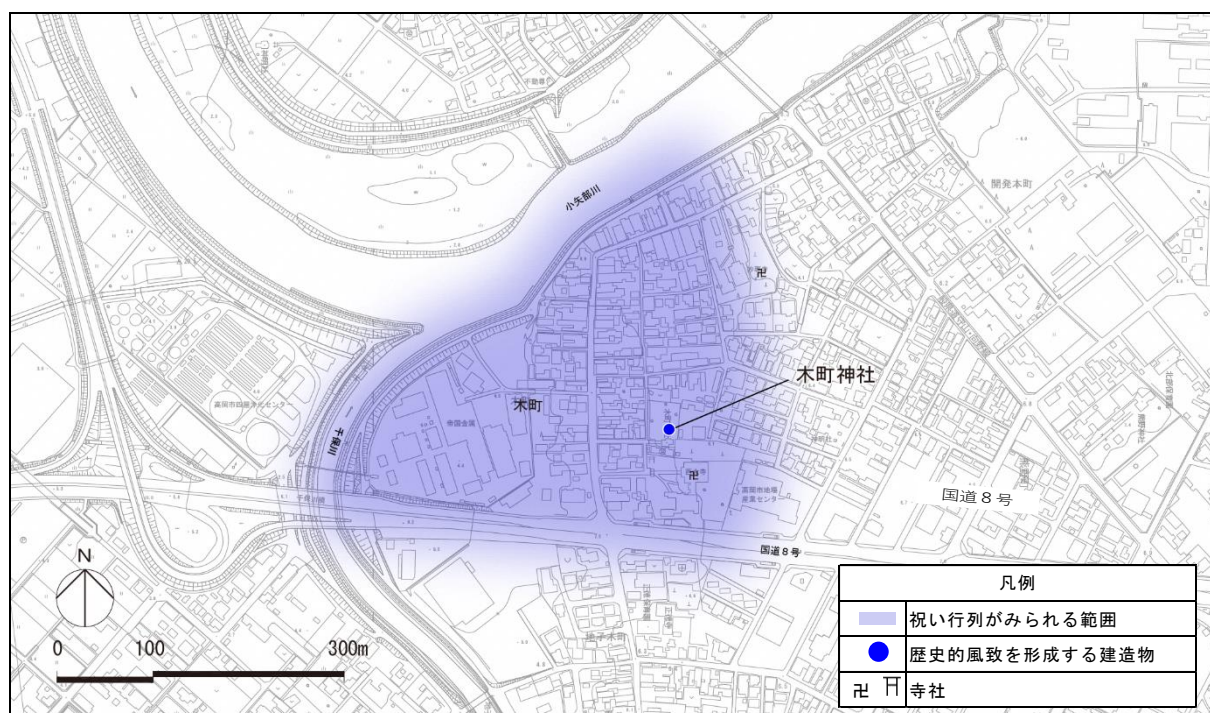
それぞれの獅子舞行事の起源は判然としないが、明治中期に市内の別の地域から伝授したことが言い伝えられているほか、地子木町で使用される獅子頭は、昭和30年（1955）に新調し昭和55年（1980）に大規模修理を行っていることが、『富山県の民俗芸能・富山県民俗芸能緊急調査報告書（平成4年（1992））』のための基礎調査として実施した地元への聞き取り記録で判明している。

獅子舞には獅子頭のほか、太鼓、笛、衣装など多彩な用具が必要であり、地域により共通点もあるが、一つとして同じものはない。特に太鼓台は、高岡御車山の花傘のような作り物で飾られている。地元においても高岡の発展を際立たせるものとして語り継がれている。

毎年9月に行われ、この日は朝から清都酒造場主屋を含む地区内をまわる。午後には、五福町神明社の境内で奉納される。天狗がなぎなたや棒を振り回し、黒塗りの大型の獅子と舞う様子は、非常に勇壮である。



図：五福町神明社における秋季祭礼行事に係る範囲



図：御書祭に係る範囲

④^{まえだとしなが}前田利長公顕彰祭

^{まえだとしなが ぼしよ}前田利長墓所には日々多くの参拝者が訪れているが、^{としなが}利長の高岡城入城の日にあたる9月13日には^{まえだとしなが}前田利長公顕彰祭が举行される。^{としなが}利長の死後、墓所では^{としなが}利長の命日に^{まえだとしなが}前田家や関係者などにより墓前参りが行われていたが、これが高岡市民に受け継がれる形で、昭和30年(1955)年代に墓前祭を举行し、昭和39年(1964)に「^{まえだとしなが}前田利長公遺徳顕彰会」が発足し、墓前祭を存続させるかたちで執り行われている。なお、以前は「墓前祭」と呼ばれていたが、平成3年(1991)から「^{まえだとしなが}前田利長公顕彰祭」として名を改め、現在まで続いている。行事の様子は、昭和34年(1959)9月13日の地元新聞に「^{まえだとしなが}前田利長公の墓前で二百人が参列しておごそかにいとなまれた」との記載があることから、当時から現在と同じ形式で執り行われていることがわかる。

i) 準備

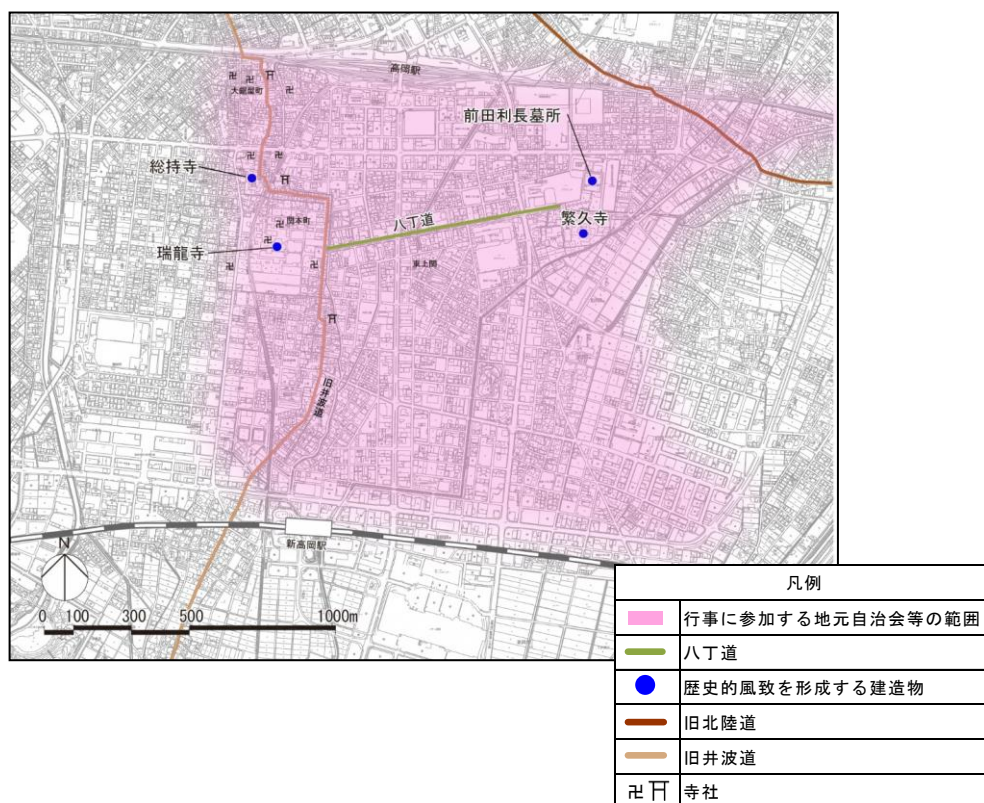
顕彰祭は厳格な一種の儀礼であるが、高岡市民にとって大切な祭事の一つであり、大勢の市民の協力のもとで行われている。特に、墓所の清掃活動が挙げられ、普段は地元自治会やボランティアなどによって定期的な清掃が行われているが、顕彰祭の一週間前には、地元自治会のみならず、^{そうじじ}総持寺、^{ずいりゅうじ}瑞龍寺、^{はんきゅうじ}繁久寺を含む地元小・中学校下内の近隣自治会やボランティア、中学生らが一丸となって清掃活動にあたる。こうして墓所はきれいになり、当日を迎えることができる。

ii) 当日

当日は、午前中に墓前に前田家当主や関係者、市民らが一堂に会する。導師入場から祭典が執り行われるが、導師は瑞龍寺より八丁道及び繁久寺を経由し入場する。導師による香語や読経、遺徳顕彰会の会長による祭文朗読などが厳粛に執り行われる。なお導師による香語とは、法要や読経などの時に導師が香を拵じて唱える言葉、法語のことである。また、有志により瑞龍寺の賛歌「ながれ雲」が披露される。導師が退場し顕彰祭は終わるが、その後も墓所の内区は開放される。普段は、鍵が掛かっており入ることができない内区であるが、この日は決められた時間に開放され、多くの参拝者が訪れ墓前でお参りをする。祭典で奉られた菓子類や生花などは、この日のために特別に用意されており、お下がりとして地元自治会等を含む顕彰祭関係者へ振る舞われ、祭典終了後には、これらを持ち帰路につく様子が見られる。また、墓所の前にある繁久寺では、大勢の市民の参加のもと茶会が催されるなど、一体的な賑わいを形成している。



前田利長公顕彰祭の様子



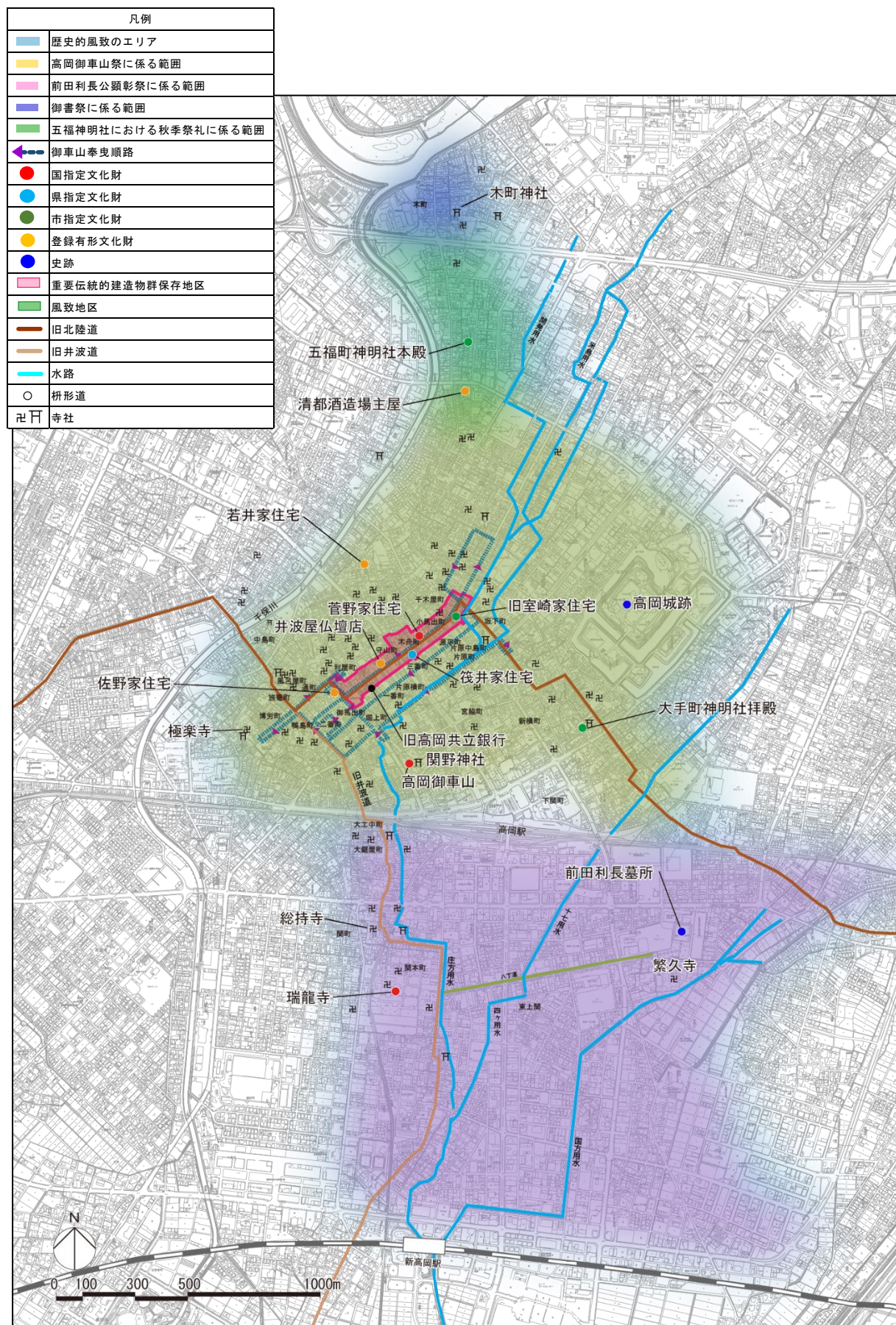
図：前田利長公顕彰祭に係る範囲

（4）まとめ

本市は、利長^{としなが}によって高岡城の城下町として開かれ、利常^{としつね}により商工業の町へと転換し、町民の活躍もあいまって商工業都市として発展してきた。この時代の町立ては、北に木町^{きまち}、東に定塚町^{じょうづかまち}、西に横田新町^{よこたしんまち}、南に神主町^{かぬしまち}と配置されており、それぞれ、木町神社^{きまちじんじや}、五福町神明社本殿^{ごふくまちしんめいしやほんでん}、高岡城跡^{たかおかじょうあと}、瑞龍寺^{ずいりゅうじ}などの加賀前田家とつながりの深い建造物が多く残されている。

高岡御車山祭^{たかおかみくるまやまつり}は高岡開町以来 400 年間、町民らにより大切に守り継がれてきた伝統行事である。木地に鮮やかな漆が塗られ、その上に桐や菊、加賀藩の家紋である剣梅鉢^{けんうめばち}などの文様の彫金金具が施された車輪や、濃青色や朱色などの生地上に、仙境^{きょうせい}図や春秋舞楽の図など様々な図柄が施され目にも鮮やかな地山を飾る幔幕^{まんまく}、優れた漆工が施された飾山を飾る高欄^{こうらん}や後屏^{こうへい}など、金工技術や漆工技術など本市が誇る工芸技術の粋を集めた御車山^{みくるまやま}と呼ばれる 7 基の山車が特徴である。この御車山^{みくるまやま}が「棹^{かみしも}」と一文字傘に威儀を正した山役員や半纏^{はんてん}に白足袋姿の曳き手とともに、高岡で最も栄えた商家町の名残を色濃く残す土蔵造りの町並みの山町筋^{やまちようすじ}や、井波屋仏壇店^{いなみやぶつだんでん}、筏井家住宅^{いかだいけじゅうたく}、菅野家住宅^{すがのけじゅうたく}、旧室崎家住宅^{きゅうむろさきけじゅうたく}などの歴史的建造物を巡行する様は、本市の積み重ねてきた歴史と伝統、町立て以来受け継がれてきた町民たちの熱い思いを物語っている。また、五福町神明社^{ごふくまちしんめいしや}で行われる獅子舞では、獅子頭のほか、太鼓、笛、衣装など多彩な用具があり、特に太鼓台は高岡御車山^{たかおかみくるまやま}の花傘のような作り物で飾られている。それらの祭道具を手にて地区内をまわる様は、地元においても高岡の発展を際立たせるものとして語り継がれていることから、一体的な歴史的風致の形成に寄与している。

前田利長墓所^{まえだとしながぼしょ}で行われる前田利長公顕彰祭^{まえだとしなが}では、多くの参拝者が訪れ墓前でお参りし、祭典で奉られた菓子類や生花などは、お下がりとして地元自治会等を含む顕彰祭関係者へ振る舞われ、祭典終了後には、これらを持ち帰っている様子がみられる。また、利常^{としつね}が利長の遺徳^{としなが}を偲んで造った瑞龍寺^し、利長の 33 回忌を期して建立された繁久寺^{はんきゅうじ}などを含む地区の地元住民らの協力により周辺の清掃活動などが行われており、当日だけでなく、こうした清掃活動などの準備期間を含めて、利常^{としつね}の兄への思いの深さを知り、感謝と畏敬の念をあらわす荘厳な雰囲気醸成する。さらに、木町神社^{きまちじんじや}で行われる御書祭^{ごしょまつり}も、町民たちの熱い思いを物語っており、当時の難渋に加賀藩から御貸米を受けたのは利長のおかげであると感謝の念を表す。町立て以来受け継がれてきた町民たちの情熱と利長・利常^{としなが}への感謝と畏敬の念が、町並みや現在も続く行事に残っており、一体となった歴史的風致を形成している。



図：加賀前田家と商人のまちに見る歴史的風致

（コラム）～瑞龍寺にまつわる行事～

① 燭光能

瑞龍寺で行われる行事に、燭光能がある。これは、利長の命日にあたる日に毎年行われる。燭光能は、瑞龍寺の『瑞龍閣記』によると、利長の33回忌に利常の命により能が奉納されたことを起源とするものである。以降瑞龍寺は折々に能の舞台となり、昭和59年（1984）に高岡能楽会が法堂を利用し能を開催して以降は、毎年定期的に燭光能が催されることとなった。燭光能は法堂の御所の間で行われる。御所の間に能楽師や観客らが集まり、蠟燭の灯りだけがゆらめく中で能が舞われる。その雰囲気は非常に幽玄なものであり、観客らはその雰囲気に魅せられる。



燭光能

② ひとつやいと

毎年6月と7月に、瑞龍寺法堂の広縁と高廊下で、ひざにお灸をしてもらい無病息災を願う「ひとつやいと」が行われる。元来、ひとつやいととは、瑞龍寺の僧が修行の疲れを癒すために約250年前から行ってきたものだが、明治以降になって、春の農作業が一段落した農民の間にも広がり、疲労が出て神経痛などの起こりやすいこの時期に、農民たちが瑞龍寺を訪れ、膝などにお灸を据えるようになった。ひとつやいとの際は、人々が一列に並び、僧侶たちから順にお灸を受ける。高岡市民は毎年この行事を楽しみにしており、瑞龍寺が市民の心の拠り所となっていることが感じられる。



ひとつやいと